

○研究あれこれ

水分の神の祭り与被差別部落

吉田栄治郎

『延書式』神名帳に宇太水分神社があり、『延喜式』祈年祭祀詞の吉野・宇陀・都祁・葛木四水分神社のうちの宇陀水分神社と考えられている。

水分は〈ミクマリ〉と読み、「水を配る」ことであり、水が分岐する場所をさす言葉である。水の分配を司る神として『古事記』の天之水分神・国之水分神があるが、宇陀水分神社の祭神も『神祇史料』によればその二神とされる。

この宇陀水分神社の比定をめぐる古くから論議があり、『神名帳考証』では『細々要記』を引いて母里村にあるとし、母里すなわち(モリ)は水分〈ミクマリ〉が転訛したものとする。また、栗田寛の『神祇史料』に引かれる「延喜式大意」には墨坂神社(現榛原町萩原)を比定している。しかし、いずれも根拠のある説とは思えず、やはり菟田野町の上芳野・古市場と榛原町下井足の三カ所に鎮座する水分社を考えるべきだろう。

三水分神社のなかでも比定地をめぐる諸説に分かれるが、享保二十一(一七三六)年刊の『大和志』には上芳野を「八幡神祠」、古市場を「古市神祠」、下井足を「宇太水分神社」とする。根拠はわからないし、三社ともに水(川)の分かれる場所にあり、社名にふさわしい鎮座地を持っていることから、『延喜式』神名帳の宇太水分神社の確実な比定は今後も困難と思われる。

さて、この三水分神社の神事の一つに九月二十一日の渡御祭がある。かつては下井足も加わっていたが江戸時代に入ることだと思われるが祭祀圏が細分されたようであり、上芳野と古市場二社間の渡御になっている。

紙幅に余裕がないため渡御の次第は省くが、要するに上芳野から神輿が古市場に渡るものであり、古市場水分神社境内での太鼓台の引き回しなど、大変な賑わいを見せる祭りである。

この渡御祭に古市場水分神社に隣接する被差別部落岩崎がかかわる。慶長二年(一五九七)に作成された「惣社水分神社縁起」(上芳野・惣社水分神社所蔵)には渡御の最後に古市場水分神社境内で行われる神事の際の警固の役を負ったこと、また、「惣社水分神社記録」(同社所蔵)にも渡御行列の「先

払い」の役を勤めることが記されている。

岩崎はもともと古市場の枝郷であり、水分社と何らかの関係を持った村であることは容易に想像がつくが、これらの記録から渡御祭において定まった役割を担っていたことが明らかになるのである。

江戸時代に、のちの被差別部落が神社とかかわりを持ったことは柳田国男・喜田貞吉によってすでに明らかにされているが、具体的な事例を一二あげれば、『月堂見聞集』に、近江国蒲生郡綾戸村苗村明神の三三年に一度の神事に際して、

穢多之者具足騎馬打物もたせ、其外は歩行甲冑旗を指、一行三十人余、穢多の事、当社降臨之節由緒有之由、穢多之人数凡三百人余、があつたと記される。また、『和漢三才図会』山城国愛宕神社の項に、

二月十五日ノ夜燃柱松明、三本高サ二丈余、如登牟止而、帷子辻屠児 穢多 抜刀廻其周圍とある。

燃えさかる松明の廻りを廻るという所作は平群郡東安堵村飽浪波神社でかつて行われた正月一日から三日の夜法会神事の松明神事に共通するものであり、火を浴びるという行為にケガレ除去の意味があったのではないかと思われる。

古市場水分神社と岩崎は相当に長く、かつ深い関係を持っている。部落問題の根源にもかかわる問題だと考えているが、今後水分社祭礼の構造的復元をとおして解明していかなければならない課題であろう。(史料センター副主幹)